

本堂には阿弥陀さまの像が二つもあって、一つは秘仏での、盆と正月におがませてもらってるんや。道景がお父さんの敏景にもうったもんで、ぶっくらとやさしいお顔してなはっての。なんでもあの有名な恵心僧都がつくられたんやと。ざっとこのお寺を五五〇年も見つけていなはるんや。江戸時代の中ごろ、どろぼうがこの阿弥陀さまをぶろしきにつつんで、おぶって下の方にげたと。するとの、急にねむとうてたまらんようになって寝てしもうた。背中がぞくぞくして、気がつくともう朝で、はっとしてあたりをみまわしたら、なんとまだ善祐寺の境内にいたんやと。「りや仏さまのバチがあたったんや。早う仏さま返さんと。」

どろぼうは、からだがふるえて止まらなんだ。
「阿弥陀さまのバチがあたってしもうた。ごえんさん、どうかゆるしておくんはい。」
と、たたみに頭ごすりつけてあやまったと。

ほれから、またずっと時がたつて……
ある時ごえんさんが、右手が痛くてたまらず、阿弥陀



さまも、

「痛い、痛い。」

とおっしゃる夢をみた。へんやなあと想着、本堂の阿弥陀さまを見にいったら、右手の人差し指が落ちてのうなっていたんやと。

⑫ 三社森

尾花の石碑あたりから沢の田んぼにかけては、昔は三社森っていうての、何百年、何千年もたった木がからみおうてて、鳥やけものが住む、昼でもうす暗い大きな森やった。なかには、まわり三尺もある太い藤づるが大木にまきついていたのもあった。村人は、この白藤の花をながめながら、田んぼ仕事に精をだした。森の中に入ると姿も見えん、声もきこえんで、弁慶がこそつといくさの相談したこともあったんやと。

森の中には、刀那神社があった。もう昔も昔、千五百年ほども昔のことや。

このあたりに継体天皇の娘さんの茨田ひめ（今ではまんだひめとよぶ）が住んでおられた。河和田のためにいろいろと尽くしてくださったんで、

このひめをおまつりしたのが刀那神社なんや。

何でもこのかやたひめの『かやた』がなまって、

今の『かわだ』になったというがの。

森の北側には茨田谷てともあるでの。



なんせ貴いお方の神社やでの、神社をよごしたり、葬列が前を通ったりすると、神さまのいかに

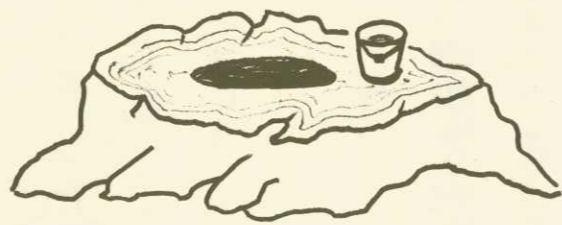
りにふれて、雷がなつて大荒れになったんやと。

けど、刀那神社は、お上の命令で寺中の神社にうつされてしもつた。もうかれこれ百年になるがの。

そのあと、神さまのいなはらん森をどうしようかってことになって、木を切つて米のようけ取れる田んぼにした。木を売ったお金で一乗谷から電気をひいたんやといの。

木を切るとき、地元の木びきは、ばちがあたるっていうて、しりごみをした。それで能登（石川県）から来た腕スキの木びきたちが切ったんや。朝みんなでガンドの目立をしてよう切れるようにして、晩方仕事がおわると目をおとしてもて、目立の技やガンドをぬすまれんように用心したといの。木びきの親方が一番大きい切りかぶをなでて、

「ごうや、まっ直ぐやろ。」と、自慢した。



そやけど、あとでいつそり切りかぶに水流しこんだら、ほんのちよい

くぼんでて、バケツ一ぱい分の水が入ったと。それほど木が太かったっていうことや。

木は新聞に広告を出して、昔の文昌小学校で競売されたと。そして、河和田川をいかだにくんではこばれたんや。

豊川稲荷（愛知県豊川市）のあの立派なけやきの門は、この森の木でできたといの。

ラポーゼの湯元も三社森やで。こいは、やっぱりほかとはちがうんやの。